人権大賞／徳岡朋花さん
家族や友達だけでなく、誰に言われても嬉しい言葉です。私も誰かの力になりたい、役に立ちたいと思っています。

優秀賞／依藤　孝さん
無関心であっては、何をするにしてもうまくいきません。人と人とのつながりが様々な活動の原点です。

人権大賞／遠藤憂子さん
「独りじゃないよ」
「SOSを出していいんだよ」
私と同じように悩みを抱える方たちに伝えたくて書きました。

標語部門

人権大賞

「ありがとう」すべてをつつむ　魔法の言葉
徳岡　朋花さん

優秀賞

とどけよう　少しの勇気に　笑顔をそえて
宮崎智佳子さん

無関心　こころ開けば　つながる絆
依藤　　孝さん

特別賞

繋ぎたい　親の想い　子の想い
絹川　万里さん

あいさつに　喜ぶ笑顔の　倍返し
名越　乙江さん

エッセイ部門

人権大賞

ミルク飴のバトン
遠藤　憂子さん

優秀賞

少年の戦い
吉原　洋子さん

父が遺したもの
藤本　　忍さん

特別賞

思いを伝え、行動を起こす
岸本　信子さん

「今も心に残る三つの言葉」から思う
中村ゆかりさん

掲載できなかったエッセイについては、スマートフォンのカメラでQRコードを読み取るとご覧になれます。また西脇市ホームページでも入賞作品を公開しています。

人権大賞

ミルク飴のバトン

遠藤　憂子さん

五年ほど前の事である。私は母の介護のため、娘を連れて満員のバスで実家に向かっていた。娘は八か月。退屈なのか、慣れない移動のせいか機嫌が悪く、大声で泣き始めた。母の介護と娘の育児、いわゆるダブルケアの真っ只中にいた私は、毎日とにかく疲れていた。ぐずる娘をあやす気力も無く、ただ身体だけを小さく丸めて周囲の視線から逃れていた。

その時、突然明るい声が降ってきた。

「ごめんねぇ、飴ちゃんしか持ってないの。まだ食べられないよねぇ。でも見てごらん。牛さんの絵が描いてあるのよ。可愛いでしょ。」

顔を上げると、前の席の女性がニコニコ微笑みながら、私の手のひらにミルク味の飴を乗せてくれていた。包み紙の牛のイラストも、私ににっこり笑っている。娘は、カサカサという音に惹かれたのか、泣くのを止めて、私の手の中の飴に小さな手を一生懸命伸ばしていた。

突然の出来事に、私は何が何だかわからなかった。飴？ 泣き止んでる？ お礼、伝えたっけ？ 気が付くと娘は、イラストの牛と同じように笑っていた。周りの人たちも、良かったね、可愛いねと、微笑んでいた。手のひらのミルク飴は温かく、強張っていた私の身体から力が抜けた。

その頃は、介護も、育児も、できるのは私しかいないのだから「ちゃんと」しなければいけない、迷惑をかけてはいけない、と自分に言い聞かせていた。頑張れば頑張るほど、責任感という呪文が、私の心を凍らせていった。硬くなった心は、やがて多くのものを撥ねつけるようになった。夫の優しさも、義母の気遣いも、娘の表情も見えなくなっていた。身体の自由が利かない母の悲しみを想像する力すら失くしていた。私だけが苦しい。私だけが辛い。私だけが。

一粒の飴が、それは大きな勘違いだと教えてくれた。私の周りには、思いやりや、優しさがたくさんあった。独りではなかった。硬くなった心が、溶けた瞬間だった。

ある日、ミルク味の飴も持て余すほど小さかった娘の手も、今では竹馬を支えるまでに成長した。ここに至るまで、私も、娘も、いったいどれだけ多くの優しさや、思いやりを受け取ってきたのだろう。独りでは決して、ここまで歩めなかった。家族や、仲間や、社会の温かな繋がりの中で、私たちは育ち、生きている。

育児も、介護も、孤独に陥りやすい。独りになる辛さを、私は知っている。そして実は見えなくなっているだけで、多くの繋がりの中に居ることも、私は知っている。

大丈夫。誰も、独りじゃない。

あの日受け取った、思いやりのミルク飴のバトン。次は、私が誰かに渡す番だ。

※写真はイメージです。作品と関係ありません。